

心理臨床カウンセリングルームとの共催事業 子育て支援プログラム

心理臨床カウンセリングルームでは、臨床心理学を基盤とした子育て支援の実践を通して、地域の子育て支援の一端を担うことを目的に、平成十三年に子育て支援プログラムを開始した。この事業は人間科学研究所と共同で行っており、スタッフとして参加する大学院生の研修の機会にもなっている。大学館内の一室で開設しており、壁面装飾やおもちゃの消毒までスタッフが手作業で準備し、地域の親子が安心して集えるよう清潔で温もりのある環境整備を心がけている。プログラムは、就学前の乳幼児と保護者を対象に「親子相談」、「うりぼうくらぶ（親子の遊びの教室）」、「子育てサークルまっぼっくり&プレイグルーブどんぐり」の三つを用意し、利用者のニーズに応えられるよう努めている。以下、それぞれのプログラムについて活動を報告する。

「親子相談」は、子どもの情緒面や発達面、また子どもへの関わり方などさまざまな内容について、親子で気軽に相談に訪れることのできる場として毎月二回開設している。ここ数年は、「ことばの遅れ」や「落ち着きのなさ」など「子どもの発達面・行動面」に関する相談が多く、就学まで定期的に相談に訪れる親子も少なくない。必要に応じて発達検査を行い、子どもの特性について共に理解を深めながら、親が一人で不安を抱えないよう丁寧

に相談をすすめるようにしている。より適切な機関へつなげることも地域の相談員の重要な役目と考え、相談の内容や状況に合わせて医療機関などを紹介することもある。発達面に関する相談以外にも、「子どもの情緒面」や親子関係についての相談などがある。子育てを通して親自身の問題が表面化することもあり、子、親それぞれへの支援と同時に、親子の「関係」を支援していく視点の重要性を感じている。個別に親子の早期の関係性を支えられる場として、他のプログラムとは特色の異なる相談機会となっており、今後も「親子相談」が活用されるよう継続していきたい。

「うりぼうくらぶ」は親子で参加できる集団遊びのプログラムで、子ども同士・親同士の交流の場として、また遊びの共有体験の場として毎月二回開催している。プログラムの前半は保育士スタッフを中心とした設定遊びの時間とし、親子のふれあい遊びに重点をおきながら、みんなで一緒に遊ぶ楽しさを味わっている。季節感のある制作も好評で、親もスタッフも童心にかえて夢中になる姿がみられている。後半は自由遊びの時間とし、スタッフも加わって親子の遊びをサポートしている。継続参加している親子の割合が高いが、初めて参加する親子からの予約も随時あり、溶け込みやすいようスタッフから声をかけることもある。子どもの日常の様子や親同士の会話のなかに子どもや親の不安や悩みがしばしば垣間見られ、そうしたサインを受けられるよう雑談の時間も大切にしている。また最近の傾向として、保育園や幼稚園に就園する前に集団活動の体験を希望して「うりぼうくらぶ」を利用することが多いようである。初

めて集団の遊びに参加する親子にとっては社会参加への第一歩としての意味合いは大きく、親子二人の関係ができることなら喜びとともに仲間関係へ開花するよう、スタッフが心を配りながら体験の共有を図っている。

「子育てサークルまっぼっくり&プレイグループどんぐり」は親子分離による活動で、全五回を一クールとして年間二クール開催している。グループは一クール固定メンバー制とし、より親密なグループ活動の要素を含んでいる。親を対象とした「子育てサークルまっぼっくり」のプログラムは、ビーズアートやヨガなどの体験ワーク、心理学のエッセンスをとり入れたグループワーク、松尾恒子名誉教授による子育て講話、参加者同士のフリートークで構成されている。今年度の参加者はすべて母親で、半数が新規参加であった。参加者である母親は、これらの種々のワークを通して子どもとの関わりを振り返ったり、育児とは別の自分の時間を過ごすことで自身の関心や意欲に気づいたりするようである。フリートークの時間には、子どもとの関係だけでなく母親自身の親との関係についても語られ、母親であると同時に娘として生きている現代の女性の姿がうかがえた。子育てを担う存在としての日常では満たされにくい自分自身の時間を、一人の人としての成長の機会として保障することも、子育て支援の重要な側面であると考えている。一方、子ども対象の「プレイグループどんぐり」では、スタッフが個々の子どもの様子をみながら、全体の子ども同士の遊びをサポートしている。初めて母親と離れて過ごす子どもは、不安で泣き続けることもたびたびであるが、受容的なスタッフと一緒に過ごす他の

子どもたちの関係に守られて徐々に落ち着き、回を重ねるたびに子ども自身のなかで活発に動き始める力を感じる。親子の分離を支えることは、スタッフにとっても親子関係の支援を考えるうえで貴重な経験となっている。

これらの活動は、臨床心理学の観点から子育て支援のあり方を模索することを目的に続けられてきた。これまでの活動から、生涯を通じた「発達」と、関係性による「関係性」支援という視点が子育て支援に有用であると感じている。子どもも親も、親子関係だけでなく社会のネットワークの中で成長していくということ、また参加親子だけでなくスタッフも参加者と支えあい育ちあって成長するということを感じながら、子育て支援プログラムの活動は今年度で八年目を迎えた。八歳といえば、関係の枠が広がり、他者との連帯感を強めながら社会的な面での成長が目標とされる時期である。これらの子育て支援プログラムも、これまでの活動の蓄積をもとに、地域のネットワークに関係づけていくことが次年度以降の課題である。

(池内まり)